



学生相談の現場から

好評企画

2011年度第2回教育支援センター 「FD研修会」開催

■ 学生相談の現場から

P1~4



湘南校舎会場 (参加者82名)

特集:座談会

SDの強化が 教育連携環境を整える

—「健康科学部および伊勢原教学課
第1回教職員協働研修会」開催—

(後編)

P5~6

■ 基礎的なマナー等の指導は、 大学のコミュニティで

■ まずは、 教職員のコミュニケーション、 イメージの共有から

■ SD INFORMATION チャレンジセンター

講師：湘南健康推進室カウンセラー
兼子 絵里

教育支援センターでは、健康推進センター湘南健康推進室にて活動されている兼子絵里カウンセラーを講師に迎え、2011年度第2回教育支援センターFD研修会を2012年1月24日に湘南校舎にて開催しました(TV会議システムで全校舎に配信)。

第1回FD研修会では、文学部心理・社会学科の宮森孝史教授(2011年度文学部常任FD委員)が、発達障害とパーソナリティ障害をキーワードに「現代大学生の心を読み解く」と題した講演を行いました。第2回目となる今回は、兼子カウンセラーに湘南健康推進室カウンセラーという立場からの学生相談、対応を中心とした講演をいただきました。

全校舎で167名に参加をしていただきましたが、今回の講演内容をより多くの教職員に共有していただくため、ポイントを『COMMUNICATION NEWS UP』にまとめました。また、DVDの貸し出しが可能(学内のみ)ですので、是非ご利用ください。

教育支援センター 内田所長のコメント

日本全体で子供達が色々な問題を抱えているのは一つの現象であって、その影響が大学にも出てきていると思っています。そういった学生の現状を知らない限り、どういった教育プログラムを作り、運営していくか、今後の施策が見えてこないと以前から思っていました。また、これからの学生の育成は、教員だけでなく各部署の職員にもご協力をいただかなければならないと考えています。是非、FD研修会を今後の業務に活かしていただきたいと思います。

教育支援センター 押野谷次長のコメント

教職員は、「ちょっとした違和感に気付く力」を培っていくことが大切だと再確認しました。早く気付いて、健康推進室へつないでいくことが、これからは求められることの一つであると思います。

学生相談の現場から

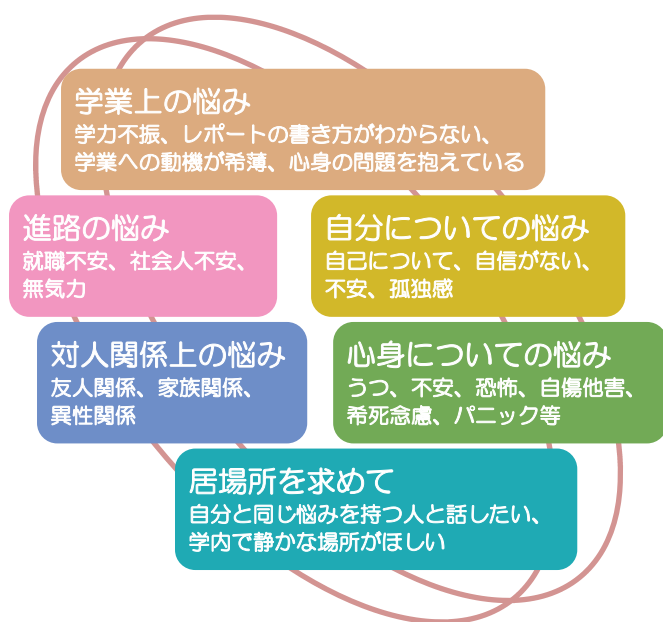
健康推進センター湘南健康推進室カウンセラー 兼子絵里

2011年度第2回教育支援センターFD研修会 講演より

学生はどんな悩みを抱えているのか

学生は、[表1]のような様々な悩みを抱えて来室します。特に今は、就職不安、社会人になることの不安感がとても強いように感じます。学内で静かな場所がほしいという場合には、湘南健康推進室の多目的室(4ページ参照)等の利用が有効です。

〔表1〕 学生が抱えている悩み



学生が育った環境、最近の学生の傾向

「ゆとり教育」で育ったことを卑下し、自信を持っていない学生が多いようです。メディアで「ゆとり教育」がマイナスイメージで取り上げられることで、それを受けてきた自分達も駄目だと感じてしまっていることが見えてきました。

インターネットを使いこなし、自分の症状に診断名をつけてくる学生は多いです。その診断名が正しいかどうかは別にしても、そういった情報が簡単に手に入るという状況は、私達の世代の環境とは随分違うのだと思っています。また、被害と加害が転々とするようないじめの経験があることで、対人不安が強いです。

〔表2〕 学生が育った環境

- ◇ ゆとり教育で育った
- ◇ 不況を知っており、将来の不安が強い
- ◇ 養護教諭、スクールカウンセラーが近い存在、場合によってはすでに利用していた
- ◇ 不登校歴は珍しくない
- ◇ 精神科、心療内科通院歴も珍しくない
- ◇ インターネットが身近どころか使いこなせる
- ◇ いじめ等を経験し対人不安が強い

最近の学生は、うまく悩めないという傾向があります。そのため、SOSを適切に出すのも苦手で、なかなか言語化してもらえません。何を不安だと思っているのか、話す訓練ができていないように思われます。

最初に来室した際に何を求めているのかアンケートをとると、「専門家の具体的なアドバイスがほしい」と記入されていることがとても多いです。問題解決志向の学生は、インターネットに質問を出して色々な人の回答を見ていたり、法テラスやハローワーク等の専門の相談先を知っていたりします。そして、抑うつ、発達障害を一発で治してほしいというような考えで、自分にとってどこがすぐに解決してくれるかを探して来室する学生が多いです。しかし、知識が豊富で、インターネットで調べてから来室するという学生がいる一方、他人が何とかしてくれるだろうと受身の学生もおり、他者と話し合う、自ら切り開くというような経験が不足している学生も多いという印象があります。

また、言語化できないので、その代わりのように体に症状を現す、問題を身体化させやすいことが多いと思います。

〔表3〕 最近の学生の傾向

- ◇ 問題を抱えていられない
- ◇ SOSを出すのが苦手
- ◇ 不安が高い、生真面目
- ◇ 知識は豊富、インターネットで調べてから来る
- ◇ 他者が解決してくれると思っている
- ◇ 経験が不足している
- ◇ 「問題解決」志向
- ◇ 問題を身体化させやすい
- ◇ 受身の態度
- ◇ 内省力、問題解決能力が育っていない
- ◇ 適切にヘルプを出すソーシャルスキルが育っていない

いまの学生のころと、それを支える対応

学生を支えるためには、あたかもコーチのようになることだと思っています。できるだけ本人の選択は尊重しつつ、一緒に考えていながらその学生にとって良い方法を選べるよう援助する、ということをしています。

また、大学で何でも解決できるということではないので、その限界を伝えることは大切だと思っています。多機関と連携することで、色々な大人が係わり、そのことは学生の成長にもつながると思います。必要があれば卒業後の支援先につながられるよう、ガイダンスをします。

薬物療法 = 医療機関
大学生生活をいかに支えるか = 学生相談

〔表4〕 学生を支える

- ◇ 大学生活を支えるコーチ
- ◇ 本人の選択を尊重する
- ◇ 大学機関としての限界を超えない
- ◇ 多機関で連携し、様々な専門家を利用する
- ◇ 成長を期待する
- ◇ 必要があれば卒業後の支援先につなげる

CASE

根本から自信がない、漠然と不安
= I'm not OK.



コーチのように励まし続け、
できたことを一緒に喜ぶ

自分の存在すべてに自信が持てていない、何か言われると全存在を否定されたように感じてしまう、そんな不安感が大きい学生には、コーチのようになりたいと考えています。「あなたの問題はあなたの全存在を否定しているものではないから、一部分変えてみることでうまくいくことがあるかも知れない」ことを伝え、その部分を一緒に考えて、できたことは一緒に喜びます。また、できないことがあったときには、できない理由は何なのか、もしかしたら、到底不可能な課題を設定しているのかも知れないので、できないということの意味を一緒に考えるようにしています。

すぐに気力がなくなりがち
= ネガティブ発想



非合理的思考の癖をなおしてもらう

すぐに気力がなくなりがちになってしまうのは、ネガティブな発想、非合理的な思い込みからくるものもあります。うまくいかない理由を挙げてみようとするの特にないことも多くあります。今までのうまくいかなかった経験により、きつとうまくいかないと思っているのかも知れないので、これからの問題については、本当にうまくいかないのかどうかを検討することが大事になります。そのため、「認知行動療法」という手法を使って、非合理的な思考の癖をなおしてもらうということは学生にとって重要です。

感覚が鈍い

= 自分の感情に気づきづらい、対処法が未熟



感情とストレス反応をつなげ、
対処力を底上げ

自分の感覚に焦点をあてて考えることが少ないためか、自分の感情に気づきづらく、対処法が未熟であるように思っています。感情とストレス反応の症状とをつなげて、今はどういう状態なのかということ話を話合うことで、対処力の底上げにつなげていきたいと思っています。

気付きのポイント、声かけのポイント

教職員は、問題の種類や障害名まで見分ける必要はないと思います。ちょっと違和感がある、周りの学生からちょっと浮き立つような感じがあるという場合は、いつでも健康推進室へ連絡をいただければと思います。

発達段階については、中学校の先生から「今は実年齢よりマイナス5歳とみる」言われたことがとても印象的です。選手を底上げするようなコーチの気持ちでみてあげたいと思います。

〔表5〕 気付きのポイント

- ◇ 問題の種類、障害名まで見分ける必要は、実はない
- ◇ 「ちょっと違和感」というアンテナ
- ◇ 発達段階を2～3段階下げてみてあげる

声かけのポイントとして、4L(Learn=理解する、Look=観察する、Listen=聞く、Link=つなげる)があります(Psychological First Aid実践原則より)。大学では何ができて何ができないのか、学生を取り巻く環境等の現状を理解し、そして、本人を観察して、どういうことで困っているのかを聴き、つなげていきます。また、話をするときは、前提を省略

せず、具体的で、簡潔であることが必要です。アスペルガー等の非定型発達の脳は、定型発達の脳と違いがあり、共有するところが少ないのは当たり前のことなので、理解した上で、異文化コミュニケーションのように丁寧に接することが重要です。

学生相談につなげるということ

健康推進室は、決して特殊な場所ではないということをご認識いただきたいと思っています。実は学生自身も特殊な場所だと思っているため、「ちょっと話してみると気が楽になるものだよ」と言ってもらえるだけでほっとします。先生に勧められて来たけれど、本当は来たくなかったと言いながら来室する学生もいますが、それでも来てくれたら、私達は喜んで一緒に問題を考えていきたいと思っています。しかし、どうしても行きたくないと言う学生については、本人の選択に任せていただければよいと考えています。そのような学生のことが心配なときは、情報を寄せてください。先生方と一緒に対応を考えさせていただきたいと思っています。

学生を支えるためには、先生は一人で抱え込まないでください。抱え込むことで、学生が他でやっていることが見えてこないこともありますので、情報の共有は大切だと考えていま

す。また、先生方ご自身のセルフケア、ストレス対処法も必要となります。そして、先生方の環境、マンパワーが充実しているのかも心配なところ。リスクマネジメントとして、何か起こったときにどういった相談経路があるのかを、問題が起きる前に確かめておかれるのがよいのではないかと思います。相談経路の一つとして健康推進室があると嬉しいです。

また、卒業や就職が困難な学生には、セーフティネットという考え方が大事だと思います。例えば、障害等で卒業水準に達することができないことについて、保護者、教職員、保健師の三者で面談するということがあってもよいのではないかと考えています。本人が卒業できると思い込んでいる場合は、本人の安全を守るために、フォローが必要です。例えば、三者面談の後に、カウンセラーと本人とを会えるようにしておくというような、何段階にも面接を構えるというのは大事なことだと考えています。

医療機関につなげるポイント

医療機関につなげる判断のポイントは、日常生活が保てているか、「睡眠」「食事」「活動」が、元気だったときと比較してどのくらい変わっているのか、だと思います。具体的には、[表6]にあるような状態です。

「睡眠」については、明日はレポートの提出、グループの発表等、寝る前に緊張することを考えてしまうことで、寝つきが悪くなり、途中で起きてしまう頻度が上がってしまいます。また、食事やタバコのためだけにしか外出ができなくなるというのは、「活動」が狭まっているということなので、日常生活が保てないと考えられます。

何かやるとすぐ疲れてしまう、おっくう、やる気が出ないというのは、うつ症状として出てきます。その他にも、ストレスを抱えた時に体に不調が出る場合もあります。頭痛、嘔吐、便秘等、人によって症状は異なります。

〔表6〕医療機関につなげるポイント

日常生活が保てているかどうか

- ◇ 睡眠（寝つきが悪い、途中で起きる、早くに目が覚める）
- ◇ 食事（食べられない、食べ過ぎる、酒やタバコが増えた）
- ◇ 活動（授業に出られない、電車やバス等に乗れない、外に出たくない）
- ◇ その他（すぐに疲れる、おっくう、やる気が出ない、身体が不調等）

守秘義務について

守秘義務は絶対です。クライアントとの信頼関係に関わるもので、自分の意に反して秘密が守られなかったということがあれば、今後の治療、予後にまで影響を及ぼします。

例外として、自傷他害の場合は、クライアントの生命や利益の保護を目的として、保護者や関係機関等に伝えることがあ

りますが、できるだけクライアントの同意を得るよう説得します。ただし、緊急時には、やむを得ない場合もあります。このことは、最初の面接契約時に文書にして渡しています。先に渡してあることで、アスペルガーの方にも有効ですし、ここではこういう方針でやっていて、これに同意をした上で面接をしましょうとすることが、カウンセラーや保健師と良好な関係を築くことにつながると思います。

学生援助の目指すところ

エンパワーメントして、本人が自己肯定感(=I'm OK.)を持てるようにしていきたいと思います。また、合理的な判断力を養うことは、抑うつを予防します。今、イギリス等では、軽度のうつ病と診断された人には、投薬ではなく、まず「認知行動療法」を導入するというガイドラインもあります。それくらい人は、非合理的な思い込みにより、つらい思いを抱え、憂鬱な気持ちになってしまうということです。合理的な判断力を養うことを学生時代にやっていたら、社会人になってからうつや適応障害になってしまうということが防げるのではないかと考えています。そして、大人の常識を伝えることも学生相談の中では必要だと考えています。学生は、非常識的な期待を持っていることもあります。それはできないと伝えることは成熟につながる大事なことだと思います。悩み力が不足している学生のためには、「ストレス状況を体験した後、自分で考えて、対処することによって和らいでく」ということをカウンセラーや援助者と一緒に体験することで、ストレス耐性が育っていくと思います。ただ、本音を友達と話せないというような安心感のない学生には、悩む体験をどこでやっていくのかという問題もあります。

どうしても解決を急ぎがちになってしまっていますが、時にはすぐに解決できない問題もあります。それを焦らせないで少しずつゴールに進んでいこうとすることが、長い目で学生のためになる、学生が育っていくことであると思っています。



湘南健康推進室 多目的室は
こんなところですよ！

「学内でみんなの喧騒を離れて少しほっとしたい」「同じような悩みや、趣味について一緒に話せる人をみつけたい」等、色々な目的で利用されています。学生の単なる「居場所」としてだけではなく、友達の輪を広げる役割も果たしています。また、学科相談員の先生もこの部屋で学生と話しています。

SDの強化が教育連携環境を整える（後編）

—「健康科学部および伊勢原教学課 第1回教職員協働研修会」開催—

教育支援センターでは、中央教育審議会答申を踏まえ、FD活動を推進する上で、SD(スタッフ・ディベロップメント:職員を対象とした、管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のための組織的な取り組み)の視点も重要なポイントだと考えています。

伊勢原校舎では、他大学から講師を招き、教職協働の意義や、講師の方の体験を基にした先行事例を教職員で共有することを目的として、「健康科学部および伊勢原教学課 第1回教職員協働研修会」を開催(2011年8月25日)しました。

今回はそれを受け、『COMMUNICATION NEWS UP』で座談会を実施し、伊勢原校舎として、FD、SD、教職協働を進める方向性や課題についてお話を伺いました。

第50号(2012年1月12日発行)では、

SDの強化が教育連携環境を整える（前編）

現状：「教職員協働研修会」は良いきっかけに
医学部：ワークショップの開催が教職協働を推進する
伊勢原校舎：SDの強化が教育連携環境を整える

として、医学部・健康科学部の現状と、ワークショップやFD研究会等を通じた教職協働の取り組みを紹介しています。

◆『COMMUNICATION NEWS UP』バックナンバーは、
教育支援センターホームページをご覧ください。

基礎的なマナー等の指導は、大学のコミュニティで

押野谷：今までに職員からこんなことをやってみたくらいという提案がなされ、教員を巻き込み一緒になって実施したという事例はありますか？

原：ちょっと前のことになりましたが、職員が主体となって企画し提案したプランが文部科学省の「海外GP」に採択され、その成果を教育プログラムとして具体化し継続しているということがあります。職員の手をもっと柔軟にして情報を収集し、色々なことに積極的に取り組んでいく必要があると思っています。その過程で、教員から教えていただけることもたくさんあると考えています。

押野谷：私の所属する工学部動力機械工学科では、就職担当の教員をサポートしている職員から、面接時の部屋の入り方、礼の仕方等、どのように指導すべきか困っているという話がありました。そこで、専門家であるキャリアカウンセラーをお招きし、教員と職員合同のFD・SD研修を行うことにしました。このことにより、学科スタッフ全員が学生に多くのヒントを伝えることができるようになりました。動力機械工学科の事例は、一学科における話題としてですが、職員からあがった声が始まりで、教員も巻き込みうまく渦ができたと思っています。

錦戸：学生の指導としては、医学部、健康科学部の場合は、学生にとっての先輩となる医師、看護師、社会福祉士等もそれぞれ実習教育に携わっていただいているので、先輩方からご意見をいただきながら連携していけると、よい形ができるので



錦戸 典子 教授
(健康科学部看護学科)

はないかと思っています。ただ、実習先で問題を起こす学生もいますので、教職員が生活や基礎的なマナー等を学生に伝えていかななくてはならないと思います。例えば、窓口での話し方も職員が気づいたことがあれば、その場その場で指導していただくことが大事だと考えています。

内田：そのあたりは、すべての教職員が学生を鍛えることのできる分野ですね。教職員が日頃からのコミュニケーションで、最近の学生がどういふところが問題なのかというところを共有しておく、対応として求められていることが認識でき、学生との適切な係わり合いが持てると思います。



内田 晴久 所長
(教育支援センター)

錦戸：今の大学生は、地域のコミュニティとの関係が希薄になり、他人から注意されたことがないというケースも多いと思います。少なくとも東海大学に入学した学生は、大学の中でしっかりとコミュニティを作り、教職員みんなで係わっていければよいと考えています。

原：先日、予備校の方と話をする機会があったのですが、現在の社会情勢を見ると社会人として身につけるべき基礎的なマナー等の教育は、大学がもっとやるべきであると指摘をされました。これについてはいろいろな議論もあるとは思いますが、専門教育ではない部分に関しては、教職員が一緒に取り組んでいかなければ効率的な指導はできないと思っています。

押野谷：大学は社会への出口の一番近いところという認識に立ち、大学のコミュニティの中で、教職員全員で役割分担をしながら、学生に係わっていくことが必要であると思います。例えば、私が子供の頃にいた近所のおじさんやおばさんのように、しっかりと叱ってくれる教職員もいつつ、叱られた後に戻ってこられるような安心できる場所も用意するといい具合です。これからは、勉強だけでなく、社会に出る



押野谷康雄 次長
(教育支援センター)

上でのストレスコントロール力も備えさせたいところです。この部分は、社会人基礎力を構成する「チームで働く力」の能力要素でもあります。

錦戸：「チームで働く力」は、「基礎ゼミ」に関する書籍等でも取り上げられ、どの学部であっても必要な力であると感じています。

押野谷：その意味でも、伊勢原校舎FD研究会の「チーム連携能力」というテーマはとてもよいと思いました。

まずは、教職員のコミュニケーション、イメージの共有から

錦戸：教員、職員双方に、教職協働でやっていくというイメージの共有があって、その後に細かいスキルの部分があると思います。教員は、入職後の研修以降は学部学科に任されるところが多いですが、職員の職能開発には方向性を示すモデル像のようなものがあるといのいかも知れません。教職

協働を推し進めるという意味では、職員の評価軸の中に、学部学科の教員とのチームワークや、コミットメントについての項目があればよいのではないのでしょうか。

原：職員はそれぞれの職種、職階で研修を受けています。職員は所属等により教員との係わり具合も異なる

ため直接的にそれを評価するという事は難しいと思いますが、一般的に「チームワーク」や「コミュニケーション」という部分は評価される事項であると思います。

錦戸：事務処理においても、学科では今は何が課題で、こういう方向でこの流れの中で必要な作業を行っていると感じた方が、楽しく仕事ができるのではないかと思います。

内田：今後は、FD、SD、教職協働をテーマとした取り組みを提案していきたいと考えています。今の学生に何が足りないのか等、問題意識を常に持ち、色々な情報を大学人として共有していきたいですね。

本日はありがとうございました。



原 義徳 室長
(伊勢原教育計画部事務室)

SD INFORMATION 今回は、チャレンジセンターで行われているSDの取り組みを紹介します！

<プロジェクトコーディネーター中間研修>

チャレンジセンターでは、プロジェクトコーディネーターのスキルアップを目的とした研修会等を年に4回開催しています。その中の1つである、「プロジェクトコーディネーター中間研修」では、**教職員に求められる能力として必要な汎用性のある内容**が扱われ、本学の一般教職員の参加も可能となっています。

※プロジェクトコーディネーター研修は、学校法人東海大学人事制度において「業務別研修」と位置づけられています。

2011年10月には、「プロジェクトにおける学生支援のあり方〜トラブルを起しやすい学生の特性と対応の仕方について」と題した研修が開催されました(TV会議システムで7校舎に配信)。

◆DVDの貸し出しが可能(学内のみ)

- プログラム**
- 1) プロジェクトにおける学生支援(コーチング)のあり方の確認
 - 2) トラブルを起しやすい学生の特徴
 - 3) コーディネーターとしての学生との向き合い方
 - 4) 学生の成長を促す関わりと適切なリファー(他部署への支援)の仕方

<プロジェクトコーディネーター・アドバイザー意見交換会>

チャレンジセンターでは、教職協働によるプロジェクト支援を実施しています。その一環として年度末にはプロジェクトのコーディネーター・アドバイザー合同で、1年間の課題を振り返り共有するための意見交換会を開催しています。2011年度は、2012年2月29日に「2011年度のプロジェクト支援の課題共有と、プロジェクト学生が目指すべき成長について」というテーマで開催(TV会議システムで6校舎に配信)され、41名の教職員が参加しました。



意見交換会の様子(湘南校舎)

問い合わせ: チャレンジセンター推進室(720-2668)

FD、SD、教職協働 について情報をお寄せください。(校舎、学部、職場単位で取り組んでいる活動等)
教育支援センター教育支援課 Tel:0463(58)1211(代)

E-mail: shien@tsc.u-tokai.ac.jp URL: http://www.esc.u-tokai.ac.jp/